

## 二 明治二十九—三十一年史

### (一) 幼稚舎の講道館柔道

柔道部に現存する勝負帳の最も古いものは、實に明治二十九年十二月、本塾道場に於て行はれた幼稚舎生の月次勝負を以て始まつてゐる。之より先、本塾部員の間には、既に幾多の試合が行はれ、大會も亦年々開かれたるにせよ、此等に關する精確なる記録にして存するものが今一つもない。その存するものは、幼稚舎生の勝負に次いで記録されてゐるのであつて、それは漸やく明治三十一年度から始まつてゐる。

當時の幼稚舎は、小學校程度より中學程度位までの教育を授けてゐたので、柔道修業には最も適せる年少者の集りであつた。既に述べたるが如く、明治二十九年古流の柔術を廢して講道館柔道を採用するに至つた幼稚舎には、本塾柔道部の上級の者が、幼者相手の興味少なき稽古にも拘らず、毎夜交替に出張して指導の任に當つてゐたのである。左れば此の時代に入れる幼稚舎の柔道部は、既に一個の獨立したるものにあらずして、本塾柔道部の一部に包含せられ、其分身であつたのである。

先輩が後進を肉弟の如くにして導き、手を取つて教へたその美はしい情景は、此の時最も能く現はれてゐたと思ふ。後明治三十一年の學制改革と共に、幼稚舎は小學制度に改められ、隨つて今迄在學せる幼稚舎の本科生（中學生）は、本塾普通部に編入せらるべきとなり、本塾柔道部はこゝに俄然一大勢力を加ふることになつた。而して普通部に合流した幼

稚舎の紅顔子たる龍駒は、軽て其驥足を伸ばして柔道部の中堅となつたのである。これは明治三十一年以後の勝負表が物語つてゐる。

### (二) 幼稚舎生の勝負記録 (その二)

明治二十九年十二月十一日(午後五時半より八時まで)

#### 二 本 勝 負

(一)	○	大倉 章雄	(六)	○	小久保 融(袈裟固)
(一)	○	三 輪 茂(足拂)	(六)	○	榎 秀四郎 (足拂足)
(二)	○	三 輪 茂	(七)	○	榎 秀四郎 (足拂足)
(二)	○	江波 善三郎(足拂返)	(七)	○	林 小三郎 (背負投)
(三)	○	江波 善三郎	(八)	○	林 小三郎 (背負投)
(四)	○	久 保 新 太(掬投)	(九)	○	平賀 恒次郎 (袈裟固)
(五)	○	久 保 新 太	(一〇)	○	森 田 宇 吉 (袈裟固)
吉 川	久 保 融(袈裟固)				森 田 宇 吉
昇	久 保 融(鉤込足)				森 田 宇 吉
佐 野	森 田 宇 吉(袈裟固)				森 田 宇 吉
志 郎					森 田 宇 吉
(一)	○	森 田 宇 吉(袈裟固)	(一一)	○	橋 本 順 三 (引落)
(一)	○	森 田 宇 吉(袈裟固)	(一二)	○	橋 本 順 三 (引落)
(一)	○	森 田 宇 吉(袈裟固)	(一二)	○	今 井 市 次 郎 (膝車返)
(一)	○	森 田 宇 吉(袈裟固)	(一三)	○	今 井 市 次 郎 (膝車返)
(一)	○	森 田 宇 吉(袈裟固)	(一四)	○	向 山 昌 治 (大外刈)
(一)	○	森 田 宇 吉(袈裟固)	(一五)	○	向 山 昌 治 (大外刈)
田 崎 鐵 太 郎(鉤込足)					向 山 昌 治

(一六)	○○	田崎 鐵太郎	(三四)	○○	加藤 東作	(横捨身)
(一七)	○○	平野 重三 (脇投)	(二五)	○○	武田 清三	(體落)
(一八)	○○	上野 直昭 (足車)	(二六)	○○	武田 清三 (巴體落)	(大外刈)
(一九)	○○	福澤 大四郎 (體落)	(二七)	○○	田邊 貞治 (體落)	(小外刈)
(二〇)	○○	平野 重三 (腕挫)	(二八)	○○	田邊 貞治 (體落)	(同)
(二一)	○○	福澤 大四郎 (體落)	(二九)	○○	濱谷 権之助 (足拂)	(同)
(二二)	○○	上野 直昭 (體落)	(三〇)	○○	濱谷 権之助 (足拂)	(足拂返)
(二三)	○○	田邊 雅助 (横捨身)	(三一)	○○	長谷川 萬兵衛	
(二四)	○○	上野 重三 (體落)	(三二)	○○	濱谷 権之助 (足拂)	(足拂固)
(二五)	○○	安齊 德三 (足拂)	(三三)	○○	安齊 德三 (足拂)	(足拂固)
(二六)	○○	遠間 平一郎 (足車)	(三四)	○○	安齊 德三 (足拂)	(足拂固)
(二七)	○○	安重一 (樂足車)	(二七)	○○	佐野 善之助 (足拂返)	(足拂足)
(二八)	○○	大石 喜一 (同體落)	(二八)	○○	玉木 和三郎 (横掛)	
(二九)	○○	守田 保太郎 (足拂)	(二九)	○○	佐野 善之助 (足拂返)	(足拂足)
(三〇)	○○	守田 保太郎 (足拂)	(三〇)	○○	山内 秀一	
(三一)	○○	守田 保太郎 (足拂)	(三一)	○○	天野 良知	
(三二)	○○	守田 保太郎 (足拂)	(三二)	○○	清水 伊勢吉 (横掛)	(大外刈返)
(三三)	○○	小柴 英待 (小外刈)	(三三)	○○	清水 伊勢吉 (横捨身)	(大外刈)
(三四)	○○	須田 卓二 (體落)	(三四)	○○	守川 玉三郎 (横捨身)	

### (三) 幼稚舎生の勝負記録 (その二)

明治三十年の記録には、四月四日に幼稚舎生の紅白勝負あり、又六月二十五日に四十七組の月次勝負と、十一月十二日に四十二組の月次勝負のあつたことが載つてゐる。

紅白勝負に就て云へば、紅組は須田氏を大將とし、守川氏を副將とし、白組は清水氏、丸山氏を大將副將としての戦であつて、數人を撫で切りにせる須田氏は、終に丸山氏に敗れて白組の勝に歸したのであつたが、其陣立てに不明の點もあれば茲に省き、左に二つの月次勝負の取組經過を掲ぐるに止める。

#### 一、六月二十五日の月次勝負

- (一) 小關寛之助は田畠辰之助(足車)に勝。
- (二) 小林昇造は小關寛之助(大外刈)に勝。
- (三) 佐伯昌道は小林昇造(小外刈)、岩崎重次郎(釣込足、足拂返)に勝、山根貫一と引分。
- (四) 吉益政一は田中勝助(大外刈、同)、勝田貴三郎(袈裟固、同)に勝、川島光之助と一本々々で引分。
- (五) 樋口鉢之助は(足車)にて、楠本文雄は(内股)にて勝負なし。
- (六) 鹿島正助は阪谷良之進の爲に(足車)を取られしが、(大外刈と小外刈)にて二本を占め、又田宮弘太郎(大外刈、釣込足)に勝。
- (七) 茂木順三郎は鹿島正助(引落)、江波善三郎(袈裟固)に勝。
- (八) 鴨脚光常は茂木順三郎(袈裟固)、片田貞治(釣込足、袈裟固)、小久保融(膝車、同)、佐野志郎(膝車、同)、久保

新太（釣込足、足拂）に勝、後勝負を中止。

（九）佐野志郎は小久保融（膝車）に勝。

（一〇）久保新太は佐野志郎（袈裟固）に勝。

（一一）榎秀四郎は久保新太（足車）に勝。

（一二）林小三郎は榎秀四郎（足拂返、小外刈）に勝、平賀恒次郎と引分。

（一三）森田宇吉は橋本順三（袈裟固）に勝。

（一四）今井市次郎は森田卯吉（足車、大外刈）に勝。

（一五）向山昌治は今井市次郎（大内刈、同）に勝、平野重三と引分。

（一六）田邊雅助は福澤大四郎（袈裟固）、大石喜一（四方固、同）に勝。

（一七）鴨脚光常（再出）は田邊雅助（立四方固）、遠間平一郎（袈裟固）に勝、安重樂と引分。

（一八）高橋信二郎は鈴木一郎（釣込腰、大腰）、上野直昭（釣込腰、大腰）、中村愛作（釣込腰、大外刈）、武田清三（大外返、大腰）、田邊貞治（田邊に裏投あり）（足車、釣込腰）、濱谷權之助（大外返、同）、安齊徳三（小外、巴投）

加藤東作（浮腰、横掛）、玉木和三郎（足車、同）、山内秀一（後腰、同）、山崎慎（山崎に小外刈あり）（巴投、大腰）の十一人に勝。

（一九）佐野甚之助は高橋信二郎（釣込足、足拂）、天野良知（後腰、大外刈）、清水伊勢吉（大外返、小外刈）に勝。

（二〇）須田卓二是佐野甚之助（小外刈、足業）に勝。

右總て四十七番組。

## 二、十一月十二日の月次勝負

(一) ○ 小關 寛之助  
勝田 貴三郎(大外刈返)  
○ 江木 定男(足横掛)

(二) ○ 南勝田 貴三郎  
保一(大外刈返)  
○ 宝田 小一郎  
吉益政一(足投)

(三) ○ 南保一  
田中 一(足拂返)  
○ 吉益政一(足拂)  
田中 勝助(膝車)

(四) × 岩崎 重次郎  
田畠 辰之助  
佐伯 昌道(足拂返)  
○ 江木 定男(足横掛)

(五) ○ 佐伯昌道(足拂返)  
山根 貫一  
佐伯昌道(小外刈)  
○ 宝田 小一郎  
吉益政一(足投)

(六) ○ 佐伯昌道(足拂返)  
山根 貫一  
佐伯昌道(引落返)  
○ 吉益政一(足投)

(七) ○ 佐伯昌道(足拂返)  
勝昌道(足拂返)  
○ 江木 定男(足横掛)

(八) ○ 森 胜  
森 胜  
佐伯昌道(足拂返)  
佐伯昌道(足拂返)  
○ 江木 定男(足横掛)

(九) ○ 川島 光之助  
木定 男  
木定 男  
同(袴袋固)  
木定 男  
木定 男  
同(袴袋固)  
木定 男  
木定 男  
同(袴袋固)

(一九) × 小泉 浩  
鹿島 正助  
茂木順三郎(同體落)

(二〇) ○ 江波善三郎  
片田 貞治(小外刈)  
茂木順三郎(巴投)

(二一) ○ 片田 貞治(足拂)  
片田 貞治(足拂)  
片田 貞治(足拂)

(二二) ○ 片田 貞治(足拂)  
久保 新太  
片田 貞治(足拂)

(二三) ○ 片田 貞治(足拂)  
佐野 志郎(小外刈)  
片田 貞治(足拂)

(二四) ○ 片田 貞治(足拂)  
佐野 志郎(小外刈)  
片田 貞治(足拂)

(二五) ○ 片田 貞治(足拂)  
林 久保 新太  
片田 貞治(足拂)

(二六) ○ 片田 貞治(足拂)  
片田 貞治(足拂)  
片田 貞治(足拂)

(二七) × 平賀 恒次郎  
片田 貞治(足拂)  
片田 貞治(足拂)

(二八) ○○ 森田 宇吉	(三三) ○○ 田邊 雅助	(三八) ○○ 武田 清三
(二九) ×○ 江波 利三郎	(三四) ○○ 安重樂	(三九) ○○ 山内秀一
(二九) ×○ 下村 米太郎	(四〇) ○○ 上野 直昭	(四〇) ○○ 山崎慎一
(二九) ×○ 向山 昌治	(三五) ×○ 中村 愛作	(四一) ○○ 高橋 信二郎
(二九) ×○ 福澤 大四郎	(三六) ○○ 田邊 貞治	(四一) ○○ 高橋 信二郎
(二九) ○○ 田邊 雅助	(三六) ○○ 田邊 貞治	(四一) ○○ 清水 伊勢吉
(二九) ○○ 大石 喜一(足拂)	(三六) ○○ 田邊 貞治	(四一) ○○ 清水 伊勢吉
(二九) ○○ 田邊 雅助	(三七) ○○ 武田 清三	(四一) ○○ 佐野 甚之助
(二九) ○○ 遠間 平一郎(腰投)	(三七) ○○ 武田 清三	(四一) ○○ 佐野 甚之助
番外	(三七) ○○ 武田 清三	(四一) ○○ 佐野 甚之助
(一) ×○ 武田 清三	(三七) ○○ 佐野 甚之助	(四一) ○○ 佐野 甚之助
(一) ×○ 向山 昌治	(三七) ○○ 佐野 甚之助	(四一) ○○ 佐野 甚之助
(一) ×○ 須田 卓二		

#### (四) 本塾第七回柔道大會

柔道大會第一回より第六回迄の記録は、今その断片すらも残存してゐない。明治三十一年に至つて吾人は大會記事とし  
て左の記録を見るのである。時は陽春三月の二十日であつた。

『此の日慶應義塾體育會柔道部の大會を塾内道場に開けり。當日は八時より正午まで、學生三十三番の取組あり、十二時休憩の後、又學生と講道館、北辰館、市内各警察署、高等學校及び明治義會等よりの來賓と取ませ、三十一番の取組あり、何れも勝者には賞品を附與し、勝負終りて平野重三氏及び外一名（幼年生）講道館投之形をなし、次で向山昌治氏外七名の體操柔之形第二種をなし、引續き大島光四郎、團平八郎二氏の講道館投之形、師範山下義韶氏及び小柴三郎氏の起倒流表之形あり、又同じく師範及び濱貞男氏の同流裏之形あり、終りて酒肴を供し、主客共に歡を盡して散じたるは夕刻なりき』。

之は第七回目の大會である。今日より見るも、盛なる大會の體裁を具へてゐたといふべきである。因に、此の時代の部員の概數は、幼稚舎生を合せて八九十名、内黒帶者（有級者）約二十名であつた。

## （五）本塾月次勝負最初の記録

明治三十一年十月二十一日

之が記錄に存する本塾部員間に行はれた最も古き勝負表である。

(一) ×	玉川保	(三)	越中谷吉次
	服部清吉	○○	小泉浩（足拂）
(二)	加藤豊次	(四)	小泉浩
○○	越中谷吉次（引拂）	○○	平野重三（巴投）
(五)	（足拂）	(六)	青木和三郎（袈裟固）
○	青木和三郎	×	青木和三郎
○	向山昌治	○	向山昌治

(七) ○	早川要助(大外落)	(一六) ○	寺田富藏	(二五) ○	鹽崎一次(內卷込)
(八) ○	伊藤重郎(足車製裝固)	(一七) ○	田邊貞治(足拂)	(二六) ○	田邊貞治(大外返)
(九) ○	小川國重郎(體落四方固)	(一八) ○	鍵劍一	(二七) ○	田邊貞治(足拂)
(一〇) ○	小川國一(橫掛四方固)	(一九) ○	倉田敬三(橫捨身)	(二八) ○	倉田敬三(橫捨身)
(一一) ○	堀切善兵衛(架裝固)	(二〇) ○	今井宣二(體落大外返)	(二九) ○	今井宣二(橫掛)
(一二) ○	堀切善兵衛(體落大外返)	(二一) ○	玉木和三郎	(二九) ○	鹽崎一次(小外刈)
(一二) ○	荒川雷太郎(體落大外返)	(二二) ○	今井宣二(橫掛)	(二九) ○	島津理左衛門(出足拂)
(一三) ○	本多親宗(體落大外返)	(二三) ○	田中信藏(足車)	(二九) ○	廣川柴田一能
(一四) ○	寺田富藏(後腰橫掛)	(二四) ○	富森長太郎(橫掛大外刈)	(二九) ○	須藤久藏(背負投)
(一五) ○	寺田富藏(腰車)	(一五) ○	清水伊勢吉(體落同體落)	(二九) ○	須藤久藏(同體落)
(一六) ○	鹽崎一次(足車)	(二九) ○	演貞男(巴投鉤込腰)	(二九) ○	大島光四郎(膝車)
(一七) ○	鹽崎一次(四方固)	(二九) ○	大島光四郎(巴投)	(二九) ○	大島光四郎(膝車)

## (六) 幹事の人々

遠くしては南摩綱夫氏及び小南英策氏に依り、近くしては平岡良助、柴田美穂、濱貞男等の諸氏に依りて基礎を固められた我が柔道部の此の時代に於ける幹事は、前時代よりの濱貞男（二段）を始めとして、大島光四郎（初段）、須藤久藏、柴田一能及び増倉啓次郎の五氏であつた。その中増倉氏は都合ありて日々の出席覺束なかりし爲め、間もなく平野勝次郎氏が之に代つて幹事に就任せられた。

## 三 明治三十一年史

### (一) 寒 稽 古

極寒三十日、東天未だ白まず、天地寂として聲なき時、朔風肌に徹するを物ともせず、嚴霜を踏んで道場に馳せ、火花を散らして演ずる壯快なる寒稽古に先づ新春の元氣を養ふは、我が柔道部年來の慣例である。此の年の寒稽古も一月十四日前四時より行はれ、皆勤者は昨年十六名であつたが、本年は五名を増して二十一名となつた。

稽古本數は、黒帶者では（四四三本）柴田一能、（三九七本）鳥津理左衛門、白帶者では（三四九本）中村愛作、（三四〇本）向山昌治、（三三七本）油井幸助、（三一八本）吉堀誠一、（二九二本）堀切善兵衛、（二八四本）井口爲熊、（二八三本）永野良造、（二七四本）越中谷吉次、（二五一本）福澤大四郎、（二四一本）木村徳太郎、（二三九本）黒田吉治、（二三七本）吉澤利次といふ順序であつた。